

藺浦外務大臣政務官御挨拶
(「ウム・カスル港改修計画」完工式)

ズベイディー運輸大臣、御臨席の皆様、

アッサラーム・アライクム（皆様、こんにちは）

- ご紹介を頂きました、日本の外務大臣政務官の藺浦健太郎です。
- 本日、ここに、「ウム・カスル港改修計画」の完工式を執り行う運びとなりましたことは、我々日本の友人にとり大きな喜びです。
- この「ウム・カスル港」は、２００３年のサッダーム政権崩壊後に、新たな国づくりに踏み出したイラクの皆様を後押しすべく、日本が円借款を用いて支援した、記念すべき第１号プロジェクトです。
- このプロジェクトは、二人の日本人外交官、奥大使と井ノ上書記官が関与したものでした。二人は２００３年に不幸にも凶弾に倒れ、無念のうちに亡くなりましたが、以来二人の遺志を引き継いだ多くの日本人の手によって、このプロジェクトは進められてきました。日本とイラクが手を携えて新生イラクの復興に取り組んできた大きな象徴として、本日、完工式を迎えるに至ったことはひととき感慨深いものであります。
- 両国の絆はこれだけに止まりません。最近の痛ましい邦人人質殺害事件に際しては、イラクの皆様が強い連帯と協力の手を差し伸べてくれました。この場を借りて心から厚く御礼申し上げます。
- 皆様の中には、この事件の衝撃によって、日本がこれまでの中東との関わり合いに及び腰になってしまうのではないかと危惧される方もいるかもしれません。
- しかし、我々は、イラクはもちろんのこと、広く中東地域の安定に向けて、皆様の古くからの友人として、また、国際社会の責任ある一員として、これまでと変わりなく日本ならではの協力を継続することをお約束します。

- このことは、昨日、バグダッドで会談した国民議会議長や、イラク政府の幹部にもお伝えしました。
- 残念ながら、中東地域はこれまで幾多の戦火に苛まれてきました。日本も先の大戦後に国土は焦土と化し、多くの尊い人命が失われた過去があります。しかしながら、日本では、これまでの戦後70年間、寛容で、他者を思いやり、勤勉な国民が、互いに助け合うことにより、困苦を乗り越えて、現在の日本を築き上げました。今、中東地域の皆様は安定と繁栄に向けてご尽力されています。そこで日本は、戦後の経験を生かす形で、長年平和の道を歩んできた国だからこそ果たせる役割があると信じております。
- 喫緊の課題である人道被害に対しては、我々は、住む処もなく、日々寒さに震えながら、飢えや病気に苦しむ避難民とその子供たちに、食料や医療物資などをとどける、命をつなぐための、人道支援を行ってきました。日本としては、今後、このような人道支援を更に拡充し、国際社会における責任を着実に果たしていきたいと考えています。
- 日本は、さらに中東諸国が恒久的な安定と繁栄を勝ち取るために、我々日本人が非軍事分野で貢献してきた強みを活かして、この地域の国づくりと人づくりを今後も力強く後押ししていく覚悟です。
- 日本は、イラクの人々が、豊かで安定した発展の道を歩んでいけることを切望しています。そしてイラクの安定と繁栄が中東地域全体の安定と繁栄の強力な柱となることを固く信じています。

アル・ヤーバーン・ダーイマン・マアクム
(日本は、常に皆様と共にあります。)

- ご静聴、ありがとうございました。

(了)